第５Ａ分科会　研究課題「教職員の専門性に関する課題」

研究主題「教職員としての課題意識をもち、専門性を高めるための教頭の関わり」

西諸支会　高原町立後川内小学校　今西　隼人

1　主題設定にあたり

主題にせまる研究にあたり、本年度も高原町の教育委員会による研究・研修・実践をベースとして高原町教頭会の研究を進めてきた。本年度から町の一貫教育は、令和８年度の全小中学校の統廃合を見据え、児童生徒が９年間を通して、校種間が「つながる」ことをキャッチフレーズとして、学力面や充実を図るための新たな研究体制が構築されており、その概要は、次の通りである。

【町一貫教育つながる部会】
① 教科（国・算・数・理・社・英）
② ふるさと教育（総合・教科）
③ 教育支援（特別支援）
④ 健康教育（体育・保健）

この他にも、小小連携・中中連携で児童生徒の交流学習（年２回）、授業研究会（年３回）、つながる保護者部会（年３回）などの取組がある。統廃合を見据え、後川内中学校では、週３回の乗り入れ授業（国・社・理・英）も始まった。このように、高原町ではいろいろな角度から教職員の専門性を高める機会があり、教頭会としてはそれらのバックアップや、指導助言を行うなどの取組を行っている。

2　研究のねらい

授業研究会や研修を通じ、教職員の専門性を高めるための教頭としての役割を追究する。

3　研究の概要と成果

○ ICT サポーター研修（R4 に８回実施）
○ 一貫教育授業研究会（小・中　年３回）
○ 町指導力アップセミナー（年３回）
○ 一貫教育３部会研修（年６回）
○ 学力向上ミーティング（教頭対象年２回）
○ ＵＤ・SWPBS・特別支援研修（町・各校）

この中から、「一貫教育授業研究会」、「特別支援研修会」での教頭の関わり方を中心に概要を述べていく。

（１）授業力の向上（一貫教育授業研究会）

本町の研究テーマは「誰一人取り残さない、個別最適な学びと協働的な学びの一体化を図る」であり、研究の視点として次の３点を掲げており、研究授業の視点ともなる。

○ユニバーサルデザインを意識した授業
○個別最適な学びと協働的な学び
○「わかる」「できる」ための ICT の活用

一貫教育授業研究会の運営について町の授業研究会は、主に次のような流れで実施しており、２年目となっている。本取組の特徴は、全町職員を Zoom でつなぎ、事前研究会を一斉に行っている。

対象校　※それぞれ別日に開催

１町統一の研究テーマ授業の構築（実施校）
２要綱・指導案を全職員に配布
３事前研究を町全ての職員で実施（Zoom）
４参観する授業の決定
５授業研究会に参加（グループ協議）
６振り返りをフォームで実施

【教頭としての関わり】

これまで授業研究会（事後）に関して、教頭会では昨年度より次のような課題が挙がっていた。

○児童・生徒の実態の違いが掴みにくい。
○校種が違うとなかなか意見が言いづらい。
○質問ばかりになり、協議が深まらない。

そこで、活発な話合いが見られないため、授業において「参考になったこと」「今後改善が必要なこと」を付箋紙に記入し事後研究会で拡大指導案に張りながらグループ協議を行う形式となった。

町授業研究会（特別支援）

事後研究会（グループ協議）

グループ協議では、町の研究テーマに沿って協議を行った。題点として多く挙げられていたのは、主に次の２点であった。

・個別最適な学びと協働的な学びの見られる授業のイメージができない。
・ユニバーサルデザインの視点をどこに位置づけたらよいか分からない。

授業研究会の中で、教頭としてはグループ協議のアドバイス、研究会の司会を通して、指導・助言を行ってきた。その結果、次のように今後の授業改善への方向付け（整理）がなされてきたように考える。

①課題に対して自分に合った方法で解決を進める。
②解決する過程で、友達に相談したり、友達の考えを参考にしたりして課題を解決できる授業構築をする。
③授業においての教師の役割は教師は児童・生徒の協働的な学びを支えるファシリテータとする。

このような授業を構築していけば、必然的に教師が説明する時間も少なくなり、児童は主体的に協働的な学びを深めることができる。

また、友達の考えを解決への手かりにしていく活動の流れは、すべての児童に対して**ユニバーサルデザインの視点**を生かした授業となっていき、この点が町の研究テーマ「だれ一人取り残さない」の部分につながっていくことと考える。

（２）施設分離型一貫教育に向けて

令和８年度から、町内小学校が現高原小学校、後川内中学校が高原中学校に統合される。

それに先立ち後川内中学校は中学校の教員が小学校の授業を受け持つ「乗り入れ授業」を開始した。後川内中学校の特徴は、後川内小の児童が週３回、午前中を中学校で過ごし、国語、社会、理科、外国語において中学校の教員の授業を受けている。年度当初、乗り入れ授業を始めるにあたって小・中両校の教頭が行ったことは、次のとおりである。

【教頭としての関わり】

①　中学校と小学校の授業時間の調整（教務主任とタイアップ）
②　管理職による予測される課題点の整理
③　授業者側の意見を聞く相談会の設置
④　教頭同士のこまめな情報交換や調整

４　今後の課題

●小中一貫教育が更に深化するよう、様々な情報収集を行い、教師の専門性を高めていく必要がある。